



foto por HARUKO MIURA

待望の再来日決定！ヘナート・モタ&パトリシア・ロバート 多様なエッセンスを共存させた曼陀羅のように複雑な音楽世界 『イン・マントラ』

文●大石 始
texto por HAJIME OISHI

ブラジルはミナスジェライス州ベロオリゾンチ出身のデュオ、ヘナート・モタ&パトリシア・ロバートの新作『イン・マントラ』は、昨年4月26日に鎌倉・光明寺で行われたパフォーマンスを収録したライブ盤だ。この時の来日ツアーでは全5公演が行われたが、『マントラ・セッション』と題されたこの日は、オリジナルのメロディーに乗せてヨガの修行で使われる祈りの言葉（マントラ）をヘナートとパトリシアが歌い、それを沢田穰治（コントラバス）とヨシタダイキチ（シタール）が支えるという形で行われた。同スタイルでのライブは全5公演でもこの日のみ。このたびリリースされる『イン・マントラ』という素晴らしいアルバムを聴きながら、光明寺に足を運ばなかったことを後悔するのは僕だけではないだろう。

僕はこの〈マントラ・セッション〉を体験することはできなかったものの、4月24日に舞浜のクラブイクスピアリで行われたライブは観ることができた。この時のサポートは沢田穰治とピアノの中島ノブユキ。ヘナートとパトリシアは彼らとわずか一回のリハーサルしか行わなかったそうだが、まるで長年活動を共にしてきたグループのようにコンビネーションは完璧。ライブ後に行った『intoxicate』誌での取材でも、ヘナートとパトリシアの2人は沢田と中島のプレイを絶賛していたものだった。

この時のライブ・パフォーマンスも実に素晴らしかった。この日はボサノヴァやMPBからの影響が水彩画のように淡く溶け合っていた、ヘナートとパトリシアが通常繰り広げているセットに乗っ取って展開されたのだが、何よりも僕の心を打ったのは2人の歌声だった。15年ほど連れ添ってきた夫婦でもある2人の歌の絡み合いにはまるで日常会話のように自然な流れがあり、歌い始める直前のちよつとした呼吸にすら美しいハーモニーを感じられるような感覚があった。歌のな



foto por SHINICHI TAKAHASHI

Renato Motha & Patricia Lobato

ヘナート「ありがとう(笑)。そういえば、ミュージシャンで作曲家の友達と正月を過ごした時、彼がこんなことを言っていたんだよ。ヘナートとパトリシアはまるでリハーサルをしたみたいに会話が合ってるよね」ってね(笑)」「パトリシア「ずっと一緒に過ごしてるから、話している内容や会話のトーンも似てきたみたい」

ヘナート「ライヴのリハーサルではよく喧嘩してるけどね(笑)。ただ、そのときぐらしか衝突しないんだけど」

パトリシア「ヘナートはすごく厳しいところがあるし、一方、私はちよつとボートとしたところがあるから(笑)。私たちのリハーサルは本当に賑やかなのよ」

冒頭にも書いたように、僕は『イン・マントラ』がレコーディングされたライヴには足を運んでいない。そのため、ライヴ中の彼らがどのような表情でパフォーマンスを行っていたかは想像を広げるしかないのだが、僕が観たライヴの際にはたびたび視線を合わせ、時には微笑み合いながらの、なんとも仲睦まじいステージングを披露してくれた。あまりキザなことを書く柄でもないが、愛に溢れたステージとはああいうものを言うのだろうかと思う。

彼らは『イン・マントラ』という素晴らしいアルバムを引っさげ、この10月末には日本に戻ってくる。山形と福岡の二都市ではデュオによるオリジナル中心のライヴを、東京と鎌倉・光明寺では沢田とヨシダを含むマントラ・セクションを行う予定だ。なお、後者のセクションではハルモニウムのMinaが新たに加わるほか、最終日となる11月6日の東京公演ではタブラのU-Zhaanを加えた6人編成での豪華セクションが繰り広げられることにもなっている。2010年11月の段階で、『イン・マントラ』の世界はどのような広がりを持っているのだろうか。また、日本人音楽家たちとどんなハーモニーを奏でてくれるのだろうか。僕は今からワクワクしている次第である。

パートからも2人の歌が聴こえてくるような、そんな濃密なステージ。僕はそれを息を呑むように凝視し、無音のなかに潜むメモデューに思いを馳せた。先述した「Intoxicate」誌の取材中、ヘナートはこんなことを話していた（以下の発言も「Intoxicate」誌のインタビューから）。

「歌が重なり合う瞬間っていうのは、僕らにとつてはすごく重要なことなんだよ。呼吸っていうのは無の空間に繋がっているから、それは音楽だけじゃないんだ。音が鳴ってない瞬間、次の音をどう出そうかと考えているその瞬間こそが僕たちにとつては大切なんだよ」

ヘナートとパトリシアが「呼吸」と言う時、そこにはヨガで得られたインスピレーションがベースとなっている。実際、パトリシアは瞑想に重きを置いたクンダリーニ・ヨガのインストラクターであり、ヘナートもまた、日常的にヨガに取り組んでいるという。

「ヨガを始める前と後では随分人生も変わったと思う。そこで得られたことが私たちの音楽にも自然に反映されているんじゃないかしら。ヨガを始めたことが自分を見つめるきっかけにもなったし、瞑想をすることで本当に自分に出会えるようになったから」（パトリシア）

「ヨガをやることで日常的な呼吸法も変わってきたしね」（ヘナート）

では、なぜブラジル人であるヘナートとパトリシアがヨガに引き寄せられていったのか。言うまでもなく、全世界的にヨガ人口が広がっている現在では、ブラジル人がヨガをやろうとも何の不思議はない。だが、彼らの故郷であるペロオリゾンチに関するヘナートのこんな発言を聞いていると、ミナス出身の氣質が彼らをごく自然にヨガへと向かわせていったように思えてならない。

「ペロオリゾンチの雰囲気はリオとはまったく

違うんだよね。ペロオリゾンチは周囲を山に囲まれているんだけど、そういう環境だと自分の内面へとベクトルが向かいがちになるんだ。リオのようなビーチ沿いの町だとより気持ちも解放的になつていくと思うんだけどね。だから、リオとペロオリゾンチでは音楽的な違いも出てくるんだと思う。僕らにしても、自分たちの内面を見つめることはとても大事なことでと考えているし、自分自身を高めたいていう意識は常に持っている。そういう部分が音楽面に反映されてるところはあるかもしれないね」（ヘナート）

ペロオリゾンチだと自分の内面へとベクトルが向かいがち——言わずもがな、この発言をそのままミナスの人間全体へと一般化するべきではないだろう。だが、このヘナートの発言は、ミルトン・ナシメントに象徴されるミナス音楽の深淵な世界観を紐解く際のひとつのヒントとなるのではないだろうか。

先のインタビューで2人は、「自身を高めた」という旨の発言を繰り返していた。例えば、彼らは09年のアルバム『ジョアンに花束を』をブラジル人作家、ジョアン・ギマランセス・ホーザに捧げていたが、ヨガ同様に重要なインスピレーション源のひとつとして文学を挙げている。

「文学は作者の内面を表現するものだと思うし、常にさまざまな作品にインスピレーションを受けているよ。僕らも表現者として自分を磨いていきたいと思っているし、その意味でも文学っていうのは最高のツールになるんだ。自分の内面をどう表現するか——文学からその点を学んでいくことによって、作詞作曲の面でもいい影響が出てくるんじゃないかな」（ヘナート）

こうした発言を並べていくことによって、もしかしたら彼らに求道者的イメージを持つ方もいるかもしれない。実際に会った彼らは

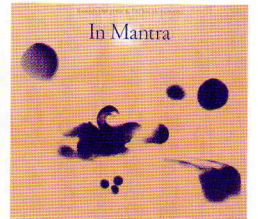
温厚かつフレンドリーな印象で、決して過剰にストイックな感じは受けなかった。ただ、音楽に対する、そして自身の表現に対する態度は真摯そのもの。それが『ジョアンに花束を』やマントラ・セツションのような形に結実していくことは、僕にはとても自然なことと思えたものだ。

マントラに対する彼らの試みが初めて世に提示されたのは、07年作『サウンズ・平和のための揺らぎ』のことだった。光明寺で行われたマントラ・セツションでは同作のレパトリが重要な位置を占めていたが、『イン・マントラ』では『サウンズ・平和のための揺らぎ』をより発展／深化させた2人の世界に触れることができる。10曲の収録曲中5曲は『サウンズ・平和のための揺らぎ』収録曲、それ以外の5曲は、今回初めて音源化された新曲だという。

どの曲においても強い印象を残すのは、ヘナートとパトリシアの歌声の重なりと、その間である。それは舞浜クラブイクスピアリで僕が受けた感銘とびつたり一致する。もちろんマントラ・セツションとMPBを軸にした通常のライブとでは演出自体が異なるわけだが、ヨガを通して習得した呼吸法／発声法がどちらのスタイルのライブにおいても重要な意味を持つていたことを再認識させられた。

また、かつてのクルビ・ダ・エスキナー派がそうであったように、ヘナートとパトリシアの2人も賛美歌などの教会音楽から強い影響を受けており、そのこともまた、この『イン・マントラ』に深みを与えている。数曲ではインド古典を参照したであろうパートを聴きとることもできるが、いくつもの多様なエッセンスが共存することにより、曼陀羅のように複雑な音楽世界がじつくりと描き出されていくのである。

ヘナート・モタ&パトリシア・ロバート
『イン・マントラ』（NKCD-1001）



沢田穠治とヨシダダイキチの演奏も素晴らしい。決して派手に自己主張することはないが、ヘナートとパトリシアの歌声にそつと寄り添い、曼陀羅模様になりげなく淡い色彩を加えていく。4人の放つメロディーが——まるで遙か昔からそうであったかのように——ごく自然に調和し、溶け合っていく様子を聞き取ることはこのうえなくスリリングな体験だ。

また、光明寺という（ライヴ・パフォーマンスを行ううえで）特殊な空間にじんわりと響き渡っていく音の粒をヴィヴィッドに捉えたレコーディングも白眉のもの。本作のライナーノーツでは高橋健太郎さんがその点を絶賛されているが、エンジニアとしても素晴らしい仕事をされた高橋さんも認めるだけあつて、会場の広がりも感じ取れる見事なレコーディングである。

そして、ヘナートとパトリシアの2人が作り上げる親密な空気感——。ここまで少し固めに筆を進めてきた嫌いがあるので、2人によるこんな会話を紹介しておこう。

ヘナート「付き合ってから15年になるんだけど、初めて会った時の彼女はまだ自分の才能に気づいてなかったんだよ。彼女は本当に素晴らしい音楽家なんだ」

パトリシア「ヘナートは素晴らしい音楽家だし、稀な才能を持っていると思う。楽器の演奏にしてもアレンジにしても作詞作曲にしても歌にしても、いろんな才能を持つてるの。彼みたいな人はいないと思うわ」